

で、日本紅斑熱は南部・中部での発生が多く、SFTS は中部・北部での発生が多かった。

恙虫病及び日本紅斑熱の3主徴である、刺し口、発熱及び発疹について比較すると、刺し口は恙虫病(88.9%)、日本紅斑熱(87.2%)のほとんどで認められたのに対し、SFTSでは約3分の1(36.8%)程度であった。

発熱は、恙虫病では94.9%であり、日本紅斑熱、SFTSでは全ての例で発熱が認められた。

発疹は恙虫病(96%)及び日本紅斑熱(89.7%)のほとんどで確認されたが、SFTSでは19例中5例(26.3%)であった。

## 2. 本県で発生したSFTSと症例定義の関連性について

本県では、平成26年11月15日現在7例の死亡例を含む19例の発生があった。

SFTSの症例定義として厚生労働省が提示した7項目について、本県で発生したSFTSに当てはめてみると次のようになった。

19例全てが適合したのは「38度以上の発熱」、「血小板の減少(10万以下)」、「白血球の減少(4000以下)」及び「他に明らかな原因がない」の4項目であった。

19例中18例が適合したのが「消化器症状」、19例中17例での適合が「集中治療を要する／要した又は死亡した」、19例中15例の適合が「AST, ALT, LDHのいずれもが上昇」であった。

## ○2013年度有害物質の摂取量推定とこれまでの年次推移

・片岡洋平<sup>1)</sup>、五十嵐敦子<sup>1)</sup>、平間祐司<sup>2)</sup>、吉崎麻友子<sup>3)</sup>、石井敬子<sup>4)</sup>、寺田久屋<sup>5)</sup>、小林博美<sup>6)</sup>、中村雅子<sup>7)</sup>、石川順子<sup>8)</sup>、山本雄三<sup>9)</sup>、古謝あゆ子<sup>10)</sup>、松田りえ子<sup>1)</sup>、渡邊敬浩<sup>1)</sup>、手島玲子<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>国立医薬品食品衛生研究所、<sup>2)</sup>北海道立衛生研究所、<sup>3)</sup>新潟県保健環境科学研究所、<sup>4)</sup>横浜市衛生研究所、<sup>5)</sup>名古屋市衛生研究所、<sup>6)</sup>滋賀県衛生科学センター、<sup>7)</sup>福井県衛生環境研究センター、<sup>8)</sup>香川県環境保健研究センター、<sup>9)</sup>宮崎県衛生環境研究所、<sup>10)</sup>沖縄県衛生環境研究所

「日本食品化学学会第20回学術講演会(平

成26年5月23日 東京都)」

【目的】有害物質の適時及び継続的な摂取量推定が本研究の目的である。本発表では、過去の研究成果や耐用摂取量が設定されていることを基準に選択した、各種元素(B, Al, Ni, Se, Cd, Sb, Ba, Hg, Pb, U, As, Sn, Cr, Co, Mo)の摂取量推定について報告した。

【方法】日本人が日常的に飲食する食事(日常食)からの各種元素摂取量を推定するため、日常食のモデルとなるトータルダイエット試料(TD試料)をマーケットバスケット方式により調製した。試料調製は地域による食品摂取パターンの違いを考慮し、全国10カ所の衛生研究所等で実施した。平成20~22年度の3カ年に行われた国民健康・栄養調査の結果を地域別に集計し、その結果(3年間の平均値)を個々の食品の摂取量とした。また、食品は、その類似性によって、14群に分類した。この分類に従い各地の小売店から食品を購入し、一般的な調理を行ってから、1日当たりの摂取量に基づき秤量し、混合・均質化してTD試料とした。

【結果・考察】2013年度の各元素摂取量推定値(全国平均値)を以下に示した。

B: 1523.8 µg/man/day, Al: 4687 µg/man/day, Ni: 156.8 µg/man/day, Se: 90.2 µg/man/day, Cd: 17.6 µg/man/day, Sb: 2.2 µg/man/day, Ba: 468.4 µg/man/day, Pb: 10.4 µg/man/day, U: 1.0 µg/man/day, As: 213.9 µg/man/day, Sn: 228.9 µg/man/day, Cr: 30.2 µg/man/day, Co: 9.0 µg/man/day, Mo: 225.3 µg/man/day, Hg: 7.9 µg/man/day.

過去30年以上にわたり摂取量推定してきたPb, Cd, As, Hgについては、昨年度の結果と同程度であった。一方、今年度はじめて全国平均値として摂取量推定を行った元素(B, Al, Ni, Cr, Se, Mo, Se, Sb, Ba, Co, U)は、年次推移は現在のところ不明であり、各群の摂取量に対する寄与率も判断できない。しかし、摂取量推定値のTDIに対する占有率が50%以上となる元素も確認されたことなどから、複数年にわたる監視が必要と考える。そのため、これら元素の摂取量の推移を明らかにし、どのような食品からの摂取寄与が大きいかなどを検討する継続的な研究を行っていく予定である。